

99年に、手足口病は95年に大きな流行がみられ、いずれもコクサッキーA群ウイルスが起因ウイルスの大多数を占めた。

イカ菓子由来のSalmonella OranienburgおよびSalmonella Chesterによるdiffuse outbreak 依田清江, 小岩井健司: 第38回千葉県公衆衛生学会, 2000. 2. 15, 千葉市

1999年春, *Salmonella* Oranienburg (*S.* Oranienburg) および *Salmonella* Chester (*S.* Chester) に汚染されたイカ菓子の喫食を原因とする食中毒のdiffuse outbreakが全国的規模で発生した。千葉県では患者, 保菌者および食品から*S.*Oranienburg 95株, *S.*Chester 13株が分離された。分離菌の性状およびDNAのPFGEの結果からイカ菓子由来であることが判明した。

患者は主に子供で, 通常のサルモネラによる腸炎症状の他に骨盤骨膿瘍が1例, 仙骨膿瘍が1例, 椎体炎が1例, 横骨髄炎が1例あり, 血液や膿, 穿刺液からも菌が分離された。

PCR法による糞便中のクリプトスポリジウムの検出

福嶋得忍, 日野隆信, 水口康雄: 第38回千葉県公衆衛生学会, 2000. 2. 15, 千葉市

クリプトスポリジウム感染症の高精度判定に役立つ試験方法を確立するため, クリプトスポリジウム感染下痢症患者の糞便を用いて, DNA抽出方法, 遺伝子増幅法 (PCR法) およびDNA-DNAハイブリダイゼーション法を検討した。その結果, アセトン固定糞便中のクリプトスポリジウムのオーシストからDNAを抽出することに成功し, 抽出DNA中のクリプトスポリジウム特異的熱ショック蛋白の遺伝子を検出することができた。この試験方法は, クリプトスポリジウム感染下痢症患者発生時の診断や感染経路解明に役立つと思われる。

千葉県下で発生した結核の集団発生を疑わせる事例より分離された結核菌のRFLP分析 岸田一則, 横山栄二, 小岩井健司, 水口康雄: 平成11年度地研全国協議会関東甲信静支部細菌研究部会第12回総会・研究会, 2000. 2. 17-2. 18, 川崎市

千葉県下で発生した結核の集団発生を疑わせる事例より分離された結核菌のRFLP分析の結果を報告した。また, 以下の問題点についてもふれた。

患者から分離された結核菌にRFLP分析を行って, その事例について検討するとことは, 感染様式の解明に役立ち, 疫学調査やその後の対策に有用な情報となる。現状では, パターンの類型化が困難である, 迅速性にかける, 薬剤感受性等の情報が得られない等の問題点も挙げられているが, 集団発生報告が相次ぐ今日, RFLP分析等の分子疫学的手法による検査は今後必須と考えられる。ただし, 結核菌からDNAを抽出するための溶菌操作後に菌の生残が認められたとの報告もあり, 検査導入に際しては, 十分な感染防御対策を講じる必要がある。

保存炭疽菌株の病原因子保有状況について 横山栄二, 岸田一則: 平成11年度第24回千葉県獣医学会, 2000. 3. 5, 千葉市

千葉県衛生研究所および関係機関に保存されていた*Bacillus*

*anthracis*の病原因子保有状況をPCRによって調査した。Pastuer II 菌株由来の2株の病原因子保有状況は, その由来と一致したが, Sternワクチン株由来2株中1株は全く病原因子を保有せず, *B.* *anthracis*のchromosomeに特異的な塩基配列であるBa813も有していなかった。また, Davis株由来3株中2株の病原因子保有状況は, Pastuer II 菌株と同一であった。以上のことから, 分与・保存の過程で菌株の取り違えが起きていたものと思われる。

フタトゲチマダニおよびその近縁種マゲシマチマダニが宿主を待ちぶせする高さにみられた地理的変異 角田隆, 立澤史郎: 第47回日本生態学会大会, 1999年3月23-26日, 東広島市

植物上でマダニが待ちぶせする時の高さは, 宿主の大きさに関係があると考えられている。宿主であるニホンジカの体の大きさに対して寄生者のマダニが待ちぶせする高さに変異が見られるか国内6カ所からマダニをサンプリングして比較した。計測の結果, 待機高は, 五葉山(足尾)金華山・天津(中島)馬毛島の順であった。野外におけるマダニの待機高と, 採集地域の気象条件(温度, 降水量)との間にはっきりとした関係は見られなかった。植物による影響を除くため, 各地域から採取したマダニを実験室内でガラス管に上らせ, 静止した高さを測定した。室内で測定されたマダニの待機高と各地域に生息するニホンジカの後足長との関係を調べたところ, 若虫において有意な正の相関が認められた ($r=0.83$, $p<0.05$)。成虫でも両者の間に弱い正の相関が見られることから ($r=0.53$), マダニ待機高の変異はシカのサイズに影響を受けていると考えられる。

3. 著書 (抄録)

紅斑熱群リケッチア症の診断について -基礎的診断法を中心として- 海保郁男, LIP, クラミジア・リケッチア感染症 ヘルペスウイルス (EBV・CMV) の潜伏再活性化, 第4巻 (倉田 毅, 天野富美夫 編), 227-241, 菜根出版, 2000.

紅斑熱群リケッチア症は, 患者数はそれほど多くはないものの太平洋岸の県を中心に発生が見られている。千葉県でも患者が確認されているため, 千葉県の患者について疫学, 血清診断法及び病原体であるリケッチアの分離方法について述べた。また, 日本各地で分離された紅斑熱群リケッチアについての解析結果を記載した。

WHO飲料水水質ガイドライン (第2版) -第2巻 健康クライテリアと関連情報- 日野隆信, 中西成子, 福嶋得忍 (分担翻訳・査読), 日本水道協会, 1999.

WHO飲料水水質ガイドライン (第2版) は, 3巻にわけて出版されることになっている。第1巻「勧告」では飲料水中の様々な物質等に関するガイドライン値とそれらの値の基礎に関する情報が要約されている。第2巻は1996年に発刊され, それぞれの汚染物質に関する研究についてまとめてあり, ガイドライン値はこれらに基づいて決定されている。この第2巻の日本語訳及び査読を分担した。